

レバ蘇枋色ナル血多ク泛テ、南殿ノ塗籠ノ方様ニ其血流レタリ、塗籠ヲ開テ見ケレバ、血ノミ多ク泛テ、他ノ物ハ無カリケリ、然レバ天皇極ク公忠ノ辨ヲ感ゼサセ給ケリ、此ノ辨ハ兵ノ家ナムトニハ非子ドモ、心賢ク思量有テ、物恐不爲、又人ニテオム有ケル、然レバ此ル物ヲモ不恐シテ伺テ蹴ルゾカシ、異人ハ極キ仰セ有ト云フトモ、然許暗キニ、其ノ南殿ノ迫ニ、只獨リ立タリナムヤ、其ノ後此ノ御燈油取ル事、絶テ無カリケリトナム、語リ傳ヘタルトヤ。

〔大鏡太政大臣忠平〕太政大臣忠平略中彼殿いづれの御時とはおぼえ侍らず、思ふに延喜朱雀院の御ほどにこそは侍りけめ、宣旨うけ給はらせ給ひて、をこなひに陣の座さまにおはしますみちに、南殿の御帳のうしろの程とをらせ給ふほどに、ものゝけはひして、御たちのいしづきをとらへたりければ、いとあやしくてさぐらせ繪ふにけはむくくとおひたる手のつめはながくかたなのはのやうなるに、おになりはりと、いとおそろしくおぼしめしけれど、おくしたるさまみえじとねんせさせ給ひて、おほやけの勅定うけ給りて、がためにまいる人とらふるはなにものぞ、ゆるさすばあしかりなんとて、御たちをひきぬきて、かれが手をとらへさせ給へりければ、まどひもちはなちてこそ、うしとらのすみざまへまかりにけれ、思ふに夜の事なりけんかし、〔古今著聞集武勇〕賴光朝臣寒夜に物へありきて歸けるに、賴信の家ちかくよりたれば、公時を使にて、只今こそ罷過侍れ此寒こそはしたなけれ、美酒侍るやといひたりければ、賴信朝臣折ふし、酒のみてゐたれける時なりければ、興に入て、只今見様に申給べし、此仰ことによろこび思ひ給候、御渡有べしといひければ、賴光則入にけり、盃酌之間、賴光廄の方を見やりたりければ、童を一人いましめてをきたりけり、あやしと見て、賴信にあれにいましめてをきたるものは、たゞと問ければ、鬼同丸なりとこたふ賴光驚て、いかに鬼同丸などをあれていにはいましめ置給たるぞ、をかしあるものならば、かくほどあだには有間敷物をといはれければ、賴信實さる事候とて、郎